

長谷川時雨・主宰

復刻版

『女人藝術』の後継誌

十五年戦争下の女性運動の状況を鮮やかに映しだす、幻の資料！

光輝ク

かがやく

全二巻・別冊一

不二出版

別冊 総目次 索引 回想・若林つや 解説・尾形明子

本体価二五、〇〇〇円

第一巻 、『輝ク』全一〇二号 第二巻 、『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』



黎明は近づくーわれらのゆく手！ さんさんたる光の中に立つわれら！

『輝ク』全一〇二号（第一巻所収）は、長谷川時雨が『女人芸術』廃刊後、女性作家・思想家が交流するためにつくった「輝く会」の機関誌として発行された。同誌には、時雨の豊かな交流関係を物語るかのように、思想の枠を越えて当時のほとんどすべての女性文化人が原稿や近況を寄せており、女性たちの一大ネットワークを思わせる。職業婦人の問題、ソ連訪問の報告、女工問題、母性保護問題、そして勤労奉仕や軍隊慰問の問題まで、太平洋戦争前夜の一九三〇年代から四〇年代の初めにかけての女性を取り巻く社会・文化・思想の状況を体現した雑誌として貴重である。

『輝く会』はまた、軍隊慰問のために一九三八年、「輝く部隊」を組織した。第二巻所収の三文集『輝く部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』は、「輝く部隊」編集による陸海軍慰問文集である。

女性を抑圧する文化・社会機構・制度に対して、女性たちは、『青鞥』や『女人芸術』などに集い、それらに異議を唱え、自己発露をしていった。『輝ク』及び『文集』は、その同じ女性たちが、十五年戦争下に次第に「銃後のつとめ」を自ら担い始め、翼賛体制に組み込まれる形で自己表現をしてゆくありさまを如実に伝えている。

本復刻が、これまで閑却されてきた女性解放運動と戦争との問題を探求するための一助となるだけでなく、戦時下の女性による文化活動を明らかにし、日本女性史を改めて検証するための資料となることを願うものである。 —不二出版

◆「輝ク」は、大海の真珠であり、空の明星であり、黎明を導く光であれ！

◆「輝ク」は、一九四二年を目ざして躍進する 全女性進出の代表的機関であり 表示板です

日本が戦争に足早で傾斜していった。昭和八年から十六年までの八年間に出版されていた四二のリーフレット『輝ク』が、このほど不二出版から復刻された。文芸雑誌『女人芸術』を主宰した長谷川時雨が、『女人芸術』の廃刊後に、女性たちの発言の場として出したものだ。小説、詩歌、評論から、各地の女性たちの近況・通信まで、当時のインテリ女性たちの多くがこの場で物を書いた。最初に見られた左翼的論調が、みるみるうちに戦争協力に——そんな戦前の女性たちの物の考え方も変化が、この百号余のリーフレットから読みとれる。

第一号は昭和八年四月一日、一部五銭で出された。原版はいまでいうとブロード判に近い大きさの新聞という体裁だが、内容は長谷川時雨を中心としたグループ機関紙の印象だ。林芙美子ら多くの女性作家を世に送り出した『女人芸術』は、昭和三年から四年間で四十八冊刊行、七年には、厳しい検閲や資金不足で廃刊になった。その後だけに『輝ク』創刊号は、「女人芸術」のように「ゆめたか」の巻頭論文、時雨の全株祝賀会の紹介など、内輪な語で埋められている。

「解放」から「皇軍慰問」へ

48年ぶりに復刻



「輝ク」の志士たち。立っているのが長谷川時雨、森田たけ、平林たけ子らの姿も見える（長谷川仁氏所蔵）

「輝ク」の志士たち。立っているのが長谷川時雨、森田たけ、平林たけ子らの姿も見える（長谷川仁氏所蔵）

「輝ク」の志士たち。立っているのが長谷川時雨、森田たけ、平林たけ子らの姿も見える（長谷川仁氏所蔵）

女性知識層の機関紙

戦争協力への軌跡問う

第一号は昭和八年四月一日、一部五銭で出された。原版はいまでいうとブロード判に近い大きさの新聞という体裁だが、内容は長谷川時雨を中心としたグループ機関紙の印象だ。林芙美子ら多くの女性作家を世に送り出した『女人芸術』は、昭和三年から四年間で四十八冊刊行、七年には、厳しい検閲や資金不足で廃刊になった。その後だけに『輝ク』創刊号は、「女人芸術」のように「ゆめたか」の巻頭論文、時雨の全株祝賀会の紹介など、内輪な語で埋められている。

第一号には、万国婦人子供博覧会（以下万国婦人子供博覧会）で来日したソ連女性の消息が、初期の『輝ク』についてどういった見られ、四号にはカナダ在住の作家・田村俊子からの便り、五号には野上弥生子の「日記」などが大きく掲載されている。『輝ク』は、戦時下の女性たちを大きく揺動させている。『輝ク』の研究者でもある尾形明子・東京女子短大助

「輝ク」の志士たち。立っているのが長谷川時雨、森田たけ、平林たけ子らの姿も見える（長谷川仁氏所蔵）

「輝ク」の志士たち。立っているのが長谷川時雨、森田たけ、平林たけ子らの姿も見える（長谷川仁氏所蔵）

激動の昭和史と真摯に切り結んだ女性たち 尾形明子

八年前の秋、私の『女人芸術』研究がまとまり、かつての『女人芸術』の方々が集まって下さった席上、編集者だった熱田優子さんから「この次はぜひ『輝ク』をやって下さいよ」と言われたことを思いだす。「戦争協力の雑誌だとか軍国主義だとか悪口ばかり言われているけど、ちゃんと読んでくれればそんなものじゃないんだけどねエ」——少し口惜しそうな熱田さんの言葉だった。

昭和八年四月一日付けで『輝ク』は発刊される。五巻六号をもって『女人芸術』が廃刊になって九カ月目、「全女性進出のための雑誌」だった『女人芸術』の理念を、時雨はこの四ページからなるリーフレットに托したといえる。「黎明は近づく——われらのゆく手！——さんさんたる光の中に立つわれら！」と題字の横には記され、ソヴェト特集やモスクワ便り、米国における職業婦人の実体ルポなど、文字どおり「唯一の進歩的女性のため」の小冊子だった。小説・随筆・評論・詩歌・通信と、この時代の他の雑誌に較べても遜色ないほどに魅力的な紙面に、時雨と編集者たちの意気込みが伝わる。が、やがて、『輝ク部隊』が生まれ、銃後運動の拠点のひとつとなっていく。激動する昭和の歴史がそのまま『輝ク』に重なる。かつて左翼運動の波が『女人芸術』を覆ったのと、それは基本的には変わらない生真面目に時代と係わりとうする女性たちの姿だともいえる。昭和十六年十一月、時雨の追悼会の様子を知らせて一〇二冊を出して終わるが、時代に組み込まれていった女性たちの姿が『輝ク』を通して鮮やかに見えてくることだろう。

（おがた・あきこ 東京女学館短期大学教授）

現在に生きる女性に自己検証を迫る復刻 加納実紀代

十五年ほど前、「銃後史」ということで戦時下の女性の軌跡をたどりはじめたとき、まず資料としたのは婦人雑誌だった。『主婦之友』『婦人倶楽部』『婦人公論』『新女苑』……、「女」「婦人」と名のつくものは、手当たり次第国会図書館で読みあさったものだ。

そのなかで出会った『女人芸術』には、眼を見張った。昭和初期の嵐の時代に、女性による女性のための女性の文化・思想運動が、こうしたかたちでなされていたのか！それは恐慌から戦争へ向かう時代の波間に漂う小舟のような危うい存在ではあったが、そこに集う女たちは、意気軒昂と時代に挑戦していた。

それだけに、『女人芸術』の廃刊には、「ああ、やっぱり……」と、大きな時代の波に飲みこまれていく小舟の運命をおもった。そして、その後身の『輝ク』が、一九四〇年女性作家を総動員して軍隊慰問のための『輝ク部隊』を刊行し、その筆者の中に宮本百合子の名前をみつけたときには、「ここまで来たか」と、胸ふさがる思いをした。

しかし、『輝ク』は、ずっと私にとって「幻の雑誌」だった。それによって知識人女性が時代の波に飲みこまれていく過程をあとづける必要を感じつつ、断片的な二、三冊しか見ることはできなかった。最近になって、近代文学館に全冊をそろっていると聞いて出かけてみたが、白黒反転のマイクロフィルムになっていて、老眼にはとても読めたものではない。それが今回、全一〇二号分が一冊にまとめられて復刻されるという。

願ってもない朗報である。といっても、単純な意味ではない。そこにあとづけられている女性たちの姿は、新たな戦前が取沙汰される現在の女性たちにも、苦しい自己検証を迫るものであるにちがいない。

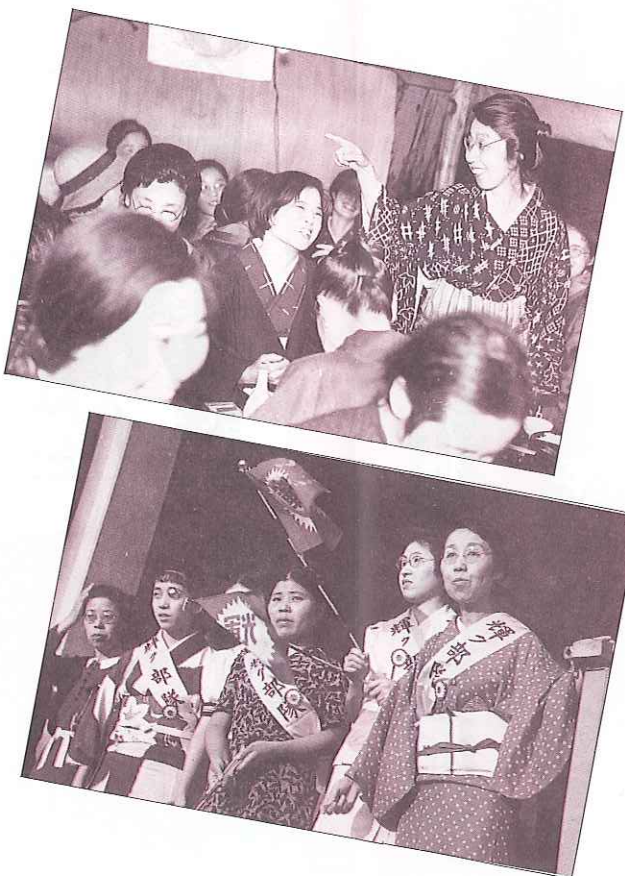
『輝ク』の復刻は、いまの私たちにとってそうした、苦しい、だからこそぜひとも必要な朗報なのだ。（かのう・みきよ 銃後史研究者）

女性史の明日をみつめるために 佐多稲子

長谷川時雨さんは、匂いたつようなひとだった。長谷川さんが亡くなってすぐに出された『輝ク』の「追悼号」に私は、「長谷川さんを喪つて、あたりが急に淋しさを感じるのは、私だけではないであらう。や、古風で美しく、それでいて闊達であった長谷川さんの存在は、私たちの心にある華やかさを感じさせてくれたやうである」と書いた。時代が侵略戦争に淒まじい勢いでかたむいていったあの時期に、長谷川さんは『女人芸術』という場を女たちにむかって開いた。そこで私も含め、どんなに多くの女たちが、行き場のない思いを存分に吐き、のびやかに深呼吸をしたことか。『女人芸術』をやめてからも、女たちが集い、互いを確かめあう場として『輝ク会』をつくったのも、長谷川さんの同性への優しく、熱いおもいが積もったことだった。

『女人芸術』も『輝ク』も、私というひとりの女の歴史のなかで、鮮やかな光景となって浮かび上がる。ただ、同時に、可能性のひとつひとつをみぎ取られ、ごく限られた条件のなかから、一日一日を選んでいったあの時代をづらい気持でおもいださずにはいられない。

復刻とは、現在を映し出す仕事である。今、そして明日、いったいいくつの選択肢が私たちの手にあるのか。『輝ク』の時代をもう一度振り返ってみることは、けっして無駄ではない。（さた・いねこ 作家）



文学史的空白を埋める貴重な資料 高崎隆治

「輝ク会」は、『女人芸術』廃刊後、長谷川時雨が文化面や社会運動などで活動する女性の思想家や文学者たちの交流のためにつくった団体である。

機関紙『輝ク』は、したがって戦後の永い年月、多くの文学関係者や女性史・女性問題研究家などの間で復刻が熱望されていたのだが、このたびようやく陽の目をみる運びとなった。

一九三三年から四一年まで、たとえば文学関係にかぎっても、野上弥生子・宮本百合子・松田解子・平林たい子・佐多稲子・田村俊子・大田洋子その他、当時の著名作家が目白押しに居並んで目を見張らせる。彼女たちの文学史的空白がこれによって埋められるのはむろんだが、同時に、その作家研究に大きな影響をおよぼさずにはないだろう。従来の評価が覆るかどうかはこれからの研究にまつことになるが、日中戦争下における彼女たちの心のかげりや、ささやかな願望や動揺などが、まぎれもなく私たちの心に伝わってくるにちがいない。

さらに、第二巻にまとめられる三冊の「慰問文集」は、日中戦争末期のものであり、太平洋戦争という決定的な悪気流に巻き込まれる直前の、彼女たちの人間として作家としてのありようを十分に示す貴重な資料である。（たかさき・りゅうじ 日本ペンクラブ会員）

昭和二十年十月十七日

輝

第五年第十號

わが将士を想ふ言葉 岡本かの子

出征軍人將士となりたまふ時、日本男子は既に神なるを感ずる。一體光る。その萬體の光、合して今、唐土の野に靡々と進み給ふを感ずる。

光輝 皇軍慰問號

敗れありとも大局に於て勝つ。武器は双方にあつて備ふる所。誠意と優秀なる氣魂を備へ、人類の絶頂所に達したる男傑切實なる魂あつて遂に勝つ。

女子は、もすそをか、けて街路の役に、また慎ましく賢き家母に、おん身等が礎したまへる父母、愛し妻、可憐なる子達の護りに、いそしめつゝあり。今や君が祖國の、日本女性等こそ、君達の男々しき

母のたより (XXにて) 大田洋子
XXは出征兵隊さんの落ちつき場所、丁度戦争場のやうです。送る人、送られる人、それを制する澤山の巡査さん馬が走る、車が走る、タンクが何十と大きな音を立て、止る。トラックは若い兵隊さんを桃の山のやうに積んで走る

また、かとも書くだらう。故國の空は守る。お心安かれ! 中空からの慰問、空のペー ジエント、その準備こそ、ちつとばかりおくれたが、やがて、その希望も達するだらう。私たちはいま、両手を擧げてお腹の底から叫んでゐる。ありがたうみなさん、ほんとうに有がたうみなさん、お互に日本の子です!

通巻五五號

関連図書のご案内



明快な女権論と男女平等論をもつて明治自由民権期に活躍した日本最初のフェミニスト・岸田俊子(中島湘煙)の全貌を浮かび上がらせる。編集・解説 鈴木裕子(第一・二・四巻)、大木基子・西川祐子(第三巻)。

湘煙選集 全四巻

- 第一巻 岸田俊子評論集
第二巻 岸田俊子文学集
第三巻 湘煙日記
第四巻 岸田俊子研究文献目録
A5判・上製・総1018頁
各巻本体価3,600円

明治初期の三女性

- 中島湘煙・若松賤子・清水紫琴
相馬黒光 著
鈴木裕子 解説
四六判・上製・332頁
本体価3,600円

資料平民社の女たち

- 鈴木裕子 編
A5判・上製・320頁
本体価5,800円
推薦 小松隆二・山泉進

日本社会主義運動の揺籃期を先駆者として活躍した女性 西川文子・堺為子・堀保子・神川松子・福田英子・菅野すが等の軌跡を、その著作及び関係者の回想・新聞雑誌記事によってあつげられた資料集。

関連年表

- 一八八〇年 岸田俊子、自由民権運動に参加
(明治13) 各地で女性解放の演説を始める
一八九〇年 集会及政社法公布。女の政治運動を全面的に禁止
一九〇四年 社会主義婦人講演会開催
一九〇五年 今井歌子・堺為子ら治安警察法改正の請願書を衆議院に提出
一九一一年 平塚らいてうら『青鞥』創刊
一九一三年 『新しい女』論議おさる(大正2)
一九一四年 尾竹一枝ら『番紅花』創刊
一九一九年 米騒動
一九二〇年 平塚らいてう・市川房枝ら、新婦人協会発会
一九二二年 九津見房子・堺真柄ら、女性社会主義団体・赤潮会を結成
一九二八年 長谷川時雨ら『女人芸術』創刊
一九三〇年 高群逸枝ら『婦人戦線』創刊
一九三三年 東洋モスリン電工工場争議
長谷川時雨ら女性文化人の交流団体『輝く会』創立機関誌『輝く』創刊
神近市子ら『婦人文芸』創刊
一九三七年 蘆溝橋事件
宮本百合子、内務省警保局から作品の発表を禁じられる
林美美子、従軍作家陸軍部隊に、吉屋信子、同海軍部隊に参加
女の手による銃後奉仕を期して『輝く部隊』、『海軍慰問のため『輝く部隊』、『海軍慰問のため『輝く部隊』、『海軍慰問文集』を発行
一九四〇年 『輝く部隊』、『海軍慰問のため』を発行
一九四一年 『輝く部隊』、『海軍慰問文集』を発行
太平洋戦争始まる
一九四五年 敗戦

母のたより (XXにて) 大田洋子
もわからぬ兵隊さんが、今は皆がわたしの息子のやうな気がいたし、可愛ゆいといほし思はれます。
夜中に兵隊さんの宿のふれが出る、此間はうちへ五人来られるとふれが出たのが夜の十二時で、二時に来られるとこのことで、西瓜を買つて来て井戸につるすやら、風呂を湧かすやら、五も御飯を炊くやらして待ちました、来られたのは三時でした。
馬の調練や積荷でもとても忙しいとのことで、上つて来る時間はなくと申され、靴のままたま頭を敲つて眠られました。XXのXX部隊の人たへ入れておきました。

青空訪問
私が映画を作製するならば、映畫とはいふもの、その全くは實現したい望みを多分に持つ空想なのだが、この光が流れるのを台圖に、空にバアンと一つの點がはちけるとき、忽ちに夜空の星のやうに無数の細かいきらめかしいものが撒らばると、見る間にそれは花傘のバラシユ

青鞥
平塚らいてう・伊藤野枝 主宰
別冊 解説・総目次・索引
解説 井手文字
A5判・並製・総8824頁
本体価1120,000円

番紅花
尾竹一枝 主宰
別冊 解説・総目次・索引
解説 渡辺澄子
菊判・上製・総1408頁
本体価18,000円(上製面入)
35,000円(特装版入)

婦人文芸
神近市子 主宰
別冊 解説・総目次・索引
解説 黒澤重里子
菊判・上製・総6362頁
本体価150,000円

輝ク

全二巻・別冊一
A5・B5判・上製・総一、二七二ページ
本体揃価格 二五、〇〇〇円／一九八八年二月刊

●収録内容

第一巻——『輝ク』全一〇二号

一九三三(昭和八)年～一九四一(昭和一六年)
B5判・上製・総四一六ページ

第二巻——『輝ク部隊』

一九四〇(昭和一五年)年
『海の銃後』 一九四〇(昭和一五年)年
『海の勇士慰問文集』一九四一(昭和一六年)年
A5判・上製・総七五六ページ

別冊——回想——若林つや(元『輝ク』編集部)

解説——尾形明子(東京女学館短大助教授)
総目次・索引
A5判・並製・八〇ページ

※別冊のみ分売可・本体価格一、〇〇〇円

女人藝術

総四八冊・別冊一・付録一
A5判・並製・総九、四〇〇ページ
本体揃価格一五〇、〇〇〇円
推薦——尾形明子・紅野敏郎・
佐多稲子・杉本苑子

昭和三年七月に創刊された『女人藝術』は、すべて女性の手になる女性の雑誌として発刊された。当初は婦人の階級的認識と、女人芸術の創造性を柱にしていたが、当時のプロレタリア文学運動の高揚に強く刺激されて、しだいに左傾化し、多くの女流作家を世に送り出すとともに、婦人の文化的・政治的啓蒙誌として重要な役割を果たし、終刊に近づくにつれて婦人労働誌的な傾向を強く示した。『青鞥』とともに女性史・文学史研究にとって不可欠の資料である。(昭和三年～七年／復刻版)



本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

不二出版

東京都文京区向丘一―二―二
TEL 〇三―三八―二―四四三三
FAX 〇三―三八―二―四四六四
振替 〔東京〕六一九四〇八四